

民児協だより



— 支えあう 住みよい社会 地域から —



緑のジャンパーと黄色のエプロンの民生委員も参加者と共に演舞を楽しみました

まなざし

心配された前日の曇り空を吹き飛ばす、夏の名残と秋の気配を感じさせる好日の9月13日、「第62回箱根町敬老会」が開催されました。

町内のボランティア団体及び民生委員・児童委員が一堂に会し開催のサポートをするなか、箱根町全体からお招きした高齢者が数々のおもてなしの演芸を楽しみ、昼食を頂き、心の底から笑い、楽しく一日を過ごす、この取り組みは62年もの間脈々と続いています。

厳粛な祝典においては、長い間高齢者福祉に力を注がれた功労者が、箱根町より表彰を受けました。

また、大正琴の演奏、保育・幼稚園生のかわいい踊り、舞台上、そして客席での全員の踊り、会場は246人の笑顔で満ち溢れ、その笑顔に私達、民生委員・児童委員もたくさんの元気を頂き、「ありがとうございます」という気持ちでいっぱいになりました。

(箱根町民生委員児童委員協議会)

◆特集 みんなで一緒に！児童委員の活動を活性化するヒント

～綾瀬市綾北地区と藤沢市片瀬地区の取り組みから～

- ひとネットワーク「学校でも家庭でもない第3の居場所」
- 解説「性のいろいろなカタチ」
- NEWS&インフォメーション「山梨県笛吹市石和地区民児協の実践」
- 通信員だより

特集

みんなと一緒に！

児童委員の活動を活性化するヒント

綾瀬市綾北地区と藤沢市片瀬地区の取り組みから

児童委員活動の活性化のヒント
キーワードは「みんなで一緒に」

児童委員制度は昨年70周年を迎えました。児童委員は、「地域の子育て応援団」として、未来を担う子どもたちやその親を応援し、楽しいことや悩みを共有しながら、日々活動しています。

今日、子どもや子育て家庭をめぐる状況は多様化かつ複雑化していることから、児童委員に寄せられる期待が、さらに大きくなってきています。

このような周囲の期待に、児童委員として応えていくため、今回は児童委員活動を盛り上げていくヒントを考えてみることにします。今回紹介する2つの取り組みからは、「みんなで一緒に」というキーワードを確認することができました。

綾瀬市綾北地区民児協
「児童委員協議会」

綾瀬市は、人口が約8万4千人で6地区の単位民児協があり、民生委員・児童委員は129名です。そのうち、20名が綾北地区民児協で活躍しています。

綾北地区民児協では、「民生委員であるが、児童委員でもある」という原点を考察し、「民生委員協議会」と「児童委員協議会」をそれぞれ設置すべきとの考えから、平成24年1月、民生委員協議会としての定例会とは別に、「児童委員協議会」を立ち上げました。以降、運営は地区会長が、担当は主任児童委員が中心となり、児童委員全員が参加のもと月1回開催しています。

児童委員としての目線と足並みを揃える場として

住宅街のなかにある綾北福祉会館に児童委員が全員集合し、児童委員協議会が開催されます。

民生委員協議会としての定例会を1時間で行ったあと、休憩を挟んで児童委員協議会が始まります。

司会は松本地区会長、主任児童委員の山口さんや照井さんが資料の作成や、当日の協議を中心となつて進めます。

内容は、①児童相談所・福祉事務所・保健所等からの情報、②他地区の主任児童委員の活動状況、③施設訪問や研修の報告、④4ヵ月健診の支援状況、⑤小中学校の状況などです。綾瀬市では、毎月主任児童委員会が行われており、そこで共有された情報も報告されます。

「特に気になる児童」については、家族を含めた近況を全員が情報共有し、日々気にかけていることもあり、学校からの情報や近所で見かけた時の様子、これからの見通しなど、とても細やかな話し合いが行われていました。

「学校行事の報告」の際にも、主任児童委員のほか、参加した児童委員から、感想や意見、子どもたちに人気のダンスの情報など、さまざまな話題が飛び交います。

議題を進めながら、地域の子どもたちへの思いを確認していく中で、みんなが児童委員として同じ目線で、足並みが揃っていく様子を目の当たりにしました。

「地域の子どもを見つめる」児童委員としての意識の変化

児童委員の矢沢さんは、「児童



研修報告では、必ず感想を伝えますと、山口さん(左上)と照井さん(右上)。



時に笑い声がありながら、テキパキと運営されています。

委員として意識して活動を始める前は、『登校しぶり』という言葉を知りなかった。単に学校へ行きたくないだけでなく、体が動かないということを知り、自分の身内だったら…と考えるようになった。あらためて、将来ある子どもたちを見守っていくことの大切さを感じている」とお話ししてくれました。

主任児童委員の山口さんは、

「児童委員協議会で報告する内容をまとめることで、日々の活動を振り返ることができる。それを今後の活動に活かそうという気持ち

も沸いてくる」とおっしゃいます。

松本地区会長は、2人のお話を受けて、「お互いに何をどうすることが児童委員なのか、定期的に確認することは大切。児童委員協議会の立ち上げ前と比べて、明らかに児童委員としての意識が変わり、役割が明確になった」と笑顔で語ります。

「あえて」悩みや楽しさを共有する場をつくる

一般的な定例会でも児童委員・主任児童委員の活動報告はあります。しかし、あえて児童委員協議会としての時間をとることで、子どもの話に特化して具体的な意見を出し合い、みんなで真剣に検討できるからこそ、児童委員全員が同じ価値観を共有し、お互いの信頼関係も強まっていくのだと感じました。

一人の子どもに対してみんなで知恵を出し合うことができたり、一つの学校行事について楽しさを共有したり、悩みを分かち合うことができる安心感が、児童委員活動の活性化につながっているのではないのでしょうか。



藤沢市片瀬地区民児協 ひだまり片瀬「にこにこ広場」

江ノ島駅から徒歩1分のところにあるボランティアセンターで「にこにこ広場」が開催されます。第2・3・4木曜日の10時になると、小さな子どもたちとお母さんたちが続々と集まります。取材当日は、2か月〜2歳くらいの子どもたちと、20〜30代のお母さんが、延べ20〜30人程集いました。



「大きくなったね」と声を掛け合うお母さんたち

この日の午前中は「保育講座」で、藤沢市の保育士が、家でもできる手遊びなどを教えてくれました。一生懸命まねをする子どももいれば、全く違うことを始める子どももいます。お母さんやスタッ

フは、微笑み見守りながらその和やかな空間を共有していました。お昼の時間になると、お母さんや子どもたちが、どこからともなく椅子とテーブルを出してきます。それぞれが持ち寄ったお弁当を食べながら、子育ての話や他愛もない話に花を咲かせ、午後は思い思いの時間を過ごします。

「自分の居場所」と思えるために みんなでつくる優しい空間

「にこにこ広場」は、行政、社協、青少年協と、民児協が共同で運営しています。児童委員・主任児童委員として中心で活動しているのは、主任児童委員の松本さんと西江さん、元主任児童委員の正田さんと有本さん。ボランティアセンターのセンター長の渋谷さんや地域のボランティアの方々もいます。毎回協力してくれる臨床心理士の原さんも、心強い存在です。市の職員の方なども来ることがあります。スタッフだけでも賑やかです。お母さんにたくさん話しかけて、悩みを聞いたりアドバイスをするといいよりは、むしろ「優しく見守る」ことに徹している姿が印象的でした。悩みがあれば親身



大きなおもちゃを持って歩けるくらい成長した子を
優しい眼差しで見守る松本さんたち

に耳を傾け、しかしお母さんたちの輪に入りすぎず、自主性を尊重し、子どもたちには目配せをします。好きな時間に来て好きな時間に帰り、イベントも参加したい人だけ参加する。まるで、誰かの家で行う茶話会のような雰囲気です。そんな、自由で安心できる空間を、子どももお母さんも、そしてスタッフも、みんなで協力してつくり上げているように感じます。

**「ゆるゆる」時に
頼れる存在として**

「最近のお母さんは働いている

人も多い。こういう場で育児友達をつくったり、情報交換をして、計画的に出産や子育てをしている。仕事に復帰する人も多く、『ここに「こ広場」があるから、もう一人、産みたいと考える人もいる』とスタッフは言います。

大きな地震が起こったときには、「こういう時ほど『ここにこ広場』をやってほしい」との声があったそうです。お母さんたちにとって、かけがえのない寄り処となっていると感じました。

日々子どもたちやお母さんの声に耳を傾け、子どもたちの成長と一緒に喜び、いざというときには頼りになる。そのような児童委員・主任児童委員としての姿を見せていただきました。

**お母さんにとって必要な場から
地域にとって必要な場へ**

ボランティアセンターで開催する「にこにこ広場」のほか、ボランティアセンターから遠い地域に向く「出張にこにこ広場」も行っています。

特に、中学校の空き教室での「出張にこにこ広場」はお母さんにも、中学校の生徒にも人気です。

生徒たちは、慣れない手つきで抱っこしたり、本を読んでくれたりします。「生徒は、赤ちゃんが泣いても『かわいい』と言ってくれる。お母さんも嬉しいと思う」と、手ごたえを感じており、今では文化祭の時も開催しています。

もともとはお母さんたちから「こんな居場所があったらいいな」という声をカタチにした「にこにこ広場」。今では、地域の中学生にとっても、赤ちゃんやお母さんと接する貴重な場として、幅を広げています。

秘訣を伺うと、「いろいろな会議や集まりの場で『にこにこ広場』の話をし、お母さんの生の声を伝えていく。たくさんの方の協力を得て、思いをつないでいくことが私たちの役割」と、お話ししてくださいました。

**児童委員活動を
活性化するヒント**

2つの活動からは、「子どもは地域の宝」という気持ちが強く伝わってきました。

その気持ちを児童委員同士で丁寧に確認し、目線や足並みを揃え、

気持ちを一につすることで日々の活動に活かしている「児童委員協議会」。児童委員は個人ですが、「児童委員協議会」としてチームになることで、課題を共有でき、前向きに子どもたちの将来を考えることができます。

そして、子どもたちの様子やお母さんたちの声を基に、みんな安心できる空間づくりをしている「にこにこ広場」。地域にとって大切な、地域からも大切にされる場に発展しています。必要とされる場にするためには、児童委員やボランティアの力はもちろん、お母さんや子どもたち、あるいは地域と一緒に作り上げていくものと教えていただきました。

*

将来を担う子どもたちが、我が地域で元気に楽しく、その子らしく育っていくことを願い、子どもたちにパワーをもらいながら活動する児童委員。児童委員が担う役割の尊さをあらためて感じました。
(広報委員／田村正一、宇田川敏枝、大沢みき、邊見千恵)

ひとネットワーク
地域と社会資源

学校でも家庭でもない第3の居場所 子どもが集う「ミナクルあすなるの家」

「学校に行けない子にどう手を差し伸べるのか」子どもへの支援の難しさとして、必ず挙げられる課題の一つです。今回は、このよ
うな子どもの孤立の問題に取り組む、座間市の「ミナクルあすなるの家」（以下、「あすなるの家」）を紹介します。

みんながくるようお願いを込めて

あすなるの家は、不登校の児童や、ひきこもりの青少年とその保護者のための居場所です。

元学校の先生が創設して16年。

現在代表の庄村さんと副代表の貝澤さんは、元主任児童委員で、当時からあすなるの家に関わっており、14名のスタッフがボランティアで協力しています。「みんながくるよ



毎週火・木10時～15時に開所。もともとは飲食店。外階段からつながる2階が集いの場です。

うに」との願いを込めて、今年から「ミナクルあすなるの家」となりました。

生活に必要なことを学べる場に

あすなるの家には、10名の子どもたちが登録しており、常時4～5名の子どもたちが訪れます。今は多くが中学生。元学校の先生だったスタッフと勉強したり、読書や散歩を楽しんだりしています。また、料理をしたり絵手紙を書くイベントや、適応指導教室（*）の児童と一緒にスポーツ交流会に参加するなど、体力の増進や心の育成、連帯感を育む要素が取り入れられているのも魅力です。

「あすなるの家は、学校に帰ることを目的にはしていません。あいさつ



子どもが描いたあすなるの家。手前にあるカウンターの前2つのちゃぶ台で自由な時間を過ごします。

をする、掃除をして帰るなど、日々の生活や家庭のなかで必要なことを学べたらよいと思う」と、庄村さんは言います。取材の当日は、中学2年生の子が、「どうぞ」といって座布団を出してくれました。

子どもたちと保護者を支える やりがいと難しさ

昨年までいた4人の中学生は、保護者やスタッフとともに努力をして、全員高校に進学しました。受験対策として面接の練習をするときには、学校の先生や教育委員会などに面接官を頼む工夫もしました。進学後に「高校に行きたくない」と相談があったときには、高校の先生と相談してフォローをし、今は元気に通学しています。

もちろん、上手くいくことばかりではありません。数年前に来訪したきりの子もいます。成人になった今も引きこもりの状態ですが、たまに手紙を出し、関係が途切れないようにしています。子どもたちのみならず、保護者同士が情報交換をしたり、悩みをスタッフが受け止める機会も設けています。ある保護者から「あす

なるに行き始めて明らかに子どもの顔つきが変わりました」と手紙をもらった時には、本当に嬉しかったと庄村さんは思い返します。

手を取り合ってより良い地域を

スタッフは毎月学校へ行つて情報交換をしたり、行政のネットワーク会議に参加するなど、学校や教育委員会、市役所などをつながりをつくりつつ、主任児童委員や教師、主婦の経験を活かし、ご縁も大切にしながら活動していました。多くの関係機関と「子どもたちの未来のため」という同じ目標に向かい、「孫を見ているように放っておけない」という温かい支援をしている様子が印象的でした。

民生委員・児童委員も、地域を良くしたい、子どもたちを支えたいという気持ちは一緒です。「互いに手をとり、良い支援ができるといいですね」と、庄村さんと貝澤さんから言葉を頂きました。

（広報委員 大沢みき、金子明）
*適応指導教室とは、教育委員会が不登校児童生徒に対して、学校に復帰できるよう、学校以外の場所で指導・援助する施設です。教育支援センターともいいます。



性のいろいろなカタチ

解説

エルジービーティー
～LGBTを理解しよう～

人の性別は、「男」と「女」という2つに分けて考えがちですが、「自分の性別に違和感がある」「同性を好きになる」などと感じる人がいることをご存知ですか？

性には境界がありません

性別には、「①体の性（戸籍上の性）」のほかに、自分自身が感じる「②心の性」や、恋愛対象の「③好きになる性」、自分の性をどのように表現したいかという「④性別表現」で考えることができます。

下の図でみると分かるように、「体の性」と「心の性」が一致しないこともあれば、「好きになる性」が異性とは限らず、同性または両方の性を好きになる人もいます。また、服装や言葉遣いなどの「性別表現」により、自分らしさを示すことができます。

このように、「男」と「女」には、明確な境界がなく、グラデーションのように多様な性があるのです。

LGBTって何？

最近LGBTという言葉をよく聞くようになりました。これは、

- L** レズビアン（女性同性愛者）
- G** ゲイ（男性同性愛者）
- B** バイセクシュアル（両性愛者）
- T** トランスジェンダー

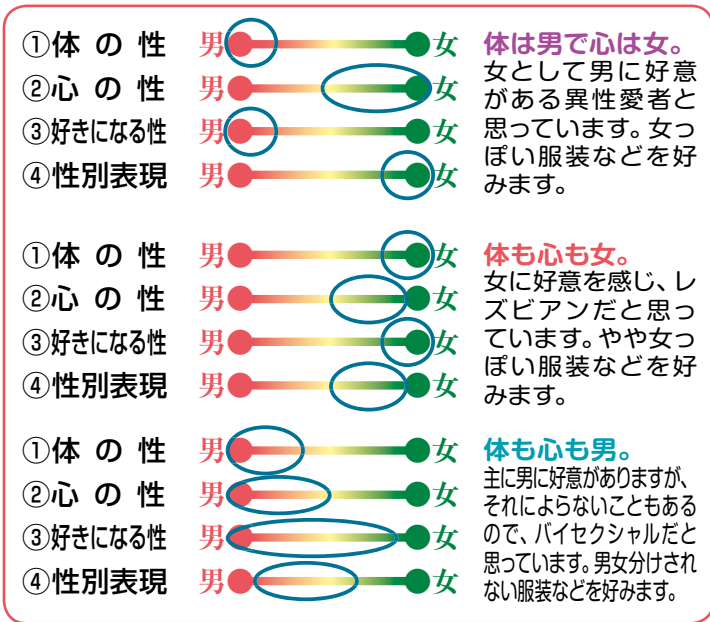
（体の性と心の性が異なる人・違和感がある人）

の頭文字です。国内では約20人が1人がLGBTと言われており、身近な地域にも、たくさんLGBTの人たちが暮らしています。

LGBTへの正しい理解を！

最近ではLGBTへの理解が少しずつ浸透していますが、これまでの偏見などにより、今なお居場所がなく孤立してしまっている人も少なくありません。これは、LGBTの人たちの課題ではなく、周囲の環境によるものです。

たとえば、「ホモ・レズ・オカマ・オナベ」という言葉は、長年笑いの対象として扱われてきました。その



神奈川県「人権学習ワークシート集高校編第15集」P.78-85を参考に作成

ため、恥ずかしい思いや自己嫌悪に陥り、引きこもりやうつ病を発症してしまうこともあります。また、「男らしく」「女らしく」という言葉もLGBTの人たちにとっては、受け入れられていないと孤立感を感じます。

しかしこれらは、周囲の人たちのLGBTへの正しい理解により軽減できる可能性があります。

周囲の環境が

「自分らしく」を支える

NPO法人SHIPの調査によると、「性の違和感」に気付く年

齢は9～19歳、「好きになる性」に気付くのは12～16歳が一番多いそうです。制服や水着を着る機会があり、性差を感じる機会が多い、多感な年齢であるがゆえ、理解あるコミュニケーションを心掛けたいものです。

たとえば、「○○ちゃん」「○○くん」という表現は、性差を表すため、近年学校教育などでは「○○さん」と統一する傾向があります。しかし、委員活動のなかでは「○○さん」というと、距離を感じてしまう場面もあると思います。そのようなときは、「なんて呼ばれたいですか？」と聞いてみましょう。LGBTの人たちに限らず、呼ばれた名前前で呼ばれることは嬉しいことです。また、「彼氏」「彼女」という表現よりは、「好きな人」や「パートナー」という言葉を使うことで、その人がその人らしくいられることにつながるかもしれません。

大切なのは、性のカタチはいろいろありますが、自分らしくいられることを、どう見守り支えられるかです。正しい理解に努めることが、まず大事な一歩ではないでしょうか。

NEWS&インフォメーション

山梨県笛吹市石和地区民児協の実践 世代間交流による高齢者の見守り「一日民生委員」活動

三浦市民生委員児童委員協議会では、3年に1度（任期の2年目）に、

他県の地区民児協等との交流研修を実施しています。市の規模が同等の地区や、関心のある実践をしている地区などに交流の依頼をし、受けて下さった地区に研修の場を設定して頂きます。一泊二日の一日目に研修・二日目は近隣の観光を組んだ日程で実施しています。

今年、山梨県笛吹市石和地区で実施している『小学生による一日民生委員活動』について研修させて頂きたいと依頼したところ、石和地区からは、三浦市で実施している『赤ちゃん訪問』について研修したいとの希望があり、この交流研修が実現しました。当日10月18日は、それぞれの提案の後、予定時間を超えての活発な意見交換ができ、充実した研修会でした。

石和地区の実践は、大変参考になるものでした。そこで今回は、石和地区の実践について紹介させていただきます。

取り組みの目的 ～子どもたちの気持ちに着目～

「少子高齢化が進み、独居高齢世帯・ひとり親家庭などが増える中、子どもたちに高齢者の見守り活動を経験してもらい、高齢者を尊敬する気持ちやボランティア活動に対する気運を醸成してほしい」との思いから始まり、今年で3年目になります。

取り組みの内容 ～下校時の見守り活動～

石和地区5カ所の小学校と連携し、9月の「老人週間」内の下校時に、地区の民生委員と6年生（参加できる子）が、通学路にある高齢者宅のうち何軒かを訪問して見守り活動をするというもので、その際、節目の年齢の方への市からの敬老祝い金を届けたり、作文の朗読をしたりして交流を図ります。

訪問の日程や経路などは、地区ごとの状況に合わせて、担当民生委員が計画を立てます。先生がついて下さる経路もあるようです。

事前準備と小学校との連携

石和地区では、日頃よりいろいろな活動を通して学校との連携を図っています。

例えば4月の定期総会では、校長先生を来賓として招待し、民児協の事業を理解してもらおう機会としています。6月の学校訪問では、それぞれの学校で地区別定例会を開催し、この時期から、学校との協議を重ね、『一日民生委員』の具体的な計画を立てていきます。

学校の協力を得て、保護者あてに、民児協の会長名で「『一日民生委員』体験事業への協力について」という手紙を配布しています。

子ども達に対しては、民生委員から事業の内容を説明し子ども達への意識喚起をしています。

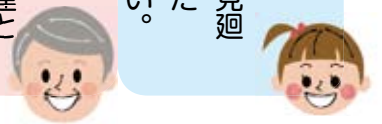
訪問する高齢者宅には、事前に連絡をし、調整します。



笛吹市庁舎前での記念写真。学びが多く充実した内容に刺激を受けました。

活動する皆さんの声

- #### 高齢者の感想
- ・喜んでくれて嬉しかった。
 - ・お年寄りの笑顔が見られた。
 - ・民生委員さんがお年寄りの見廻りをしていることがわかった。
 - ・民生委員の仕事をしてみたい。
- #### 子ども感想
- ・子ども達が氣勢で来てくれて嬉しい。元気が出る。
 - ・普段話すことがない子ども達と話ができてとっても嬉しい。
 - ・運動会の話聞かせてもらった。



今後に向けての抱負は？

高齢者が子ども達と気楽に挨拶や会話をかわしたり、児童が自由に高齢者宅を訪問できたり、世代を超えて互いに見守りできる地域にしていきたいと、お話をしてくださいました。

笛吹市民児協では、昨年、民生委員児童委員活動のさらなる充実強化を図るとともに、子ども達の健全育成を願い、市内の小中学校に「児童憲章」の額を贈呈したそうです。石和地区の実践とともに、未来を担う子ども達への希望、世代間交流や他機関連携による地域の繋がりに期待にあふれた実践だと感じました。

（三浦市民児協／広報委員 宇田川敏枝）

通信員だより

鎌倉市

私たちはこんな 広報活動をしています！

通信員 角田 孝子

鎌倉市民児協では、3つの研究部会を設けて様々なテーマで調査研究活動をしています。これまで高齢者、障害者、児童等の諸問題や災害時の避難行動要支援者への対応、地域福祉の課題等に取り組んできましたが、今期新たに設けられた広報部会を紹介したいと思います。

現在鎌倉市内では20余名の民生委員・児童委員及び主任児童委員が活動していますが、その存在は充分周知されているとは言えません。そこで今期は広報部会を設け、民生委員・児童委員の活動を市民に広く知っていただくための試行錯誤をしています。

その活動の環として、年間4回市内全戸に配付されている「かまぐら社協だより」に民児協の活動を紹介するコーナーを設けさせていただきました。これまでに民生委員・児童委員の活動内容や体験談、主任児童委員の紹介や子育てサロンの記事等を掲載してきました。また来年春には、鎌倉駅地下道ギャラリーで活動紹介のパネル展を開催して多くの市民に民生委員・児童委員の存在をアピールする企画を立てています。

これからも私たちの活動に関心を持っていただけるような広報活動をしていきたいと思っています。



社協だよりでPR!

二宮町

民生委員の日の活動を通して 下校時の見守り活動を中心

通信員 井上 鈴子

二宮町民児協では5月の活動強化週間の際、積極的なPR、訪問活動を行っています。

中でも民生委員の日には、毎年研修や小学校新1年生の下校の見守りを行っています。

児童委員制度70周年を昨年迎えたことに

因み、今年の研修会は平塚児童相談所の方を講師に招き、児童相談所の業務や児童虐待について、また、見守り依頼を受けた時の対応について学びました。

食食は恒例のおたのしみで、ともしびショップ「なのはな」のお弁当と、二宮ブランドのスィーツを頂きながら委員間で有意義な意見交換もしました。

見守りは、下校時刻に合わせて、各委員が担当区域小学校まで移動し、安全確認をしながら新1年生の子どもたちと下校します。

ある年は、校外学習で吾妻山に登った日だったため、そこからの下校に付き添いをしたことも…。

今年「全校一斉下校日」で、顔馴染みの子どもたちも多く、上級生の児童からは「井上さん!!」と声をかけられ、思わず嬉しくなりました。運動会の応援に行く約束も交わし、地域の子どもたちとの交流がさらに深まりました。



「さようなら」と元気な声が響きます

中井町

子ども自立生活支援センター 施設訪問

通信員 山口 貴美江

中井町民児協では、平塚市にある神奈川県立子ども自立生活支援センター「きらり」の施設訪問をしました。

「きらり」は、子どもたち一人ひとりが「きらきらと輝くように」と命名され、平成29年4月に開所し、乳児院・福祉型障がい児入所施設・児童心理治療施設の3つが併設された施設です。子どもたちは、生活で必要な支援や自立に向けた支援を受けながら生活しています。施設内は、階ごとに廊下や、廊下に置かれている椅子が淡い色で統一されており、やさしい空間に心がなごみました。

乳児院は、0歳から2歳児。入所状況は満床(12名)と聞き、大変驚きました。様々な状況の中で出生し、施設に入所していますが、お食い初め・ひな祭り等の季節のお祝い事を、施設のスタッフの皆さんが親の代わりにしています。家庭的な環境のなかで手厚い養育がされて育った子どもたちは、素晴らしい人に成長していくだろうと思いつつ、施設を後にしました。

これからも、中井町民児協の基本理念「たすけあい・ささえあい・みとめあい」を基に、住民と福祉サービスのつなぎ役として活動していきます。



「子どもは地域の宝」ということを再確認しました。